

言語論

人間科学的省察

Reflections on Language

N. チョムスキー

井上和子・神尾昭雄・西山佑司●共訳

新たな人間科学の構築



独自の着眼と透徹した理論形成によって言語研究に革命をひき起し、隣接諸科学に多大なインパクトを与えた天才兄チョムスキーの最新の思索の結晶。認識の根源から説き起し、言語研究の方法論的基盤を改めて問い直す。その省察は現代哲学、心理学の根本問題までをも射程に入れた壮大な人間科学を構築する。

大修館書店

2600円

言語論

人間科学的省察

Reflections on Language

N. チョムスキー

井上和子・神尾昭雄・西山佑司●共訳

訳者紹介

井上和子（いのうえかずこ）
1919年生れ。津田英学塾卒業。
現在 国際基督教大学教授。

神尾昭雄（かみおあきお）
1942年生れ。慶応義塾大学卒業。
現在 静岡大学講師。

西山佑司（にしやまゆうじ）
1943年生れ。慶応義塾大学卒業。
現在 慶応義塾大学言語文化研究所助教授。

言語論—人間科学的省察
K. Inoue
© A. Kamio 1979
Y Nishiyama

1979年4月1日 初版発行 ￥ 2600

検印	訳者	井上和子
省略		神尾昭雄
		西山佑司
	発行者	鈴木敏夫

発行所 株式会社 大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京(294) 2221 (大代表) / 振替 東京 9-40504

印刷/太文堂 製本/牧製本 装幀/鳥居 満

3080-210750-4305

原著はしがき

本書の第一部は、一九七五年一月にマクマスター大学で行なったウィドン講義に手を加えたものである。第二部は、(カシャー編・一九七〇)イヨシュア・バーヒレル記念論文集に掲載のため一九七四年六月に提出した試論を改訂したものである。この試論では、本書において展開されている一般的見解に対する批判を考察したが、これは私の以前の著作において示したところと変りがない。第二部では、議論の内的一貫性を保つために、ウィドン講義においていささか異なった形で展開したテーマを要約した部分をいくらか残しておいた。

本書の内容の多くは、MIT「マサチューセッツ工科大学」およびその他における講義で述べたもので、多くの学生諸君、同僚、友人からの貴重なコメントや批判に負うところが多い。とりわけ第一部第三章で論評している研究は、多くの人々から寄せられた提言や研究成果を取り入れたもので、実際に引用したものは、それらの一部を示すにすぎないのである。なかでも、ハリ・ブラッケン、ドナルド・ハクネイ、レイ・ジャッケンドフ、ジャステイン・リーバー、ジュリアス・モラヴチック、ヘンリー・ローズモンドからは、本書の初期の草稿に対して有用なコメントを得た。さらにマクマスター大学教授会諸賢との活発で広範にわたる議論からも益するところがあった。

ノーム・チョムスキー

マサチューセッツ州、ケンブリッジにて

一九七五年四月

N. Chomsky

Reflections on Language

© J.L. Schatz, Trustee of Chomsky Children's Trust # 2, 1975

*This edition is published in Japan by arrangement
made with Pantheon Books, a division of Random House, Inc.
through Kern Associates*

TAISHUKAN PUBLISHING COMPANY, 1979

言 語 と 哲 学	言 語・詩 学・哲 学	言 語 と 行 為	チ ョムス キーと 現代哲 学
西沢 J・J・カ 山田 ャツ 佑允 ツ 司茂 監 訳修著	新 B・ス 井 靖 ネ 一ル 訳著	坂 J・L・オ 本 ー 百 ス 大 テ イ ン 訳著	井 J・DK・オ ロ ット・ア 省 ハー 吾 バ マ ス 訳 著 ル
A 5判 一・三 九〇 四一 円頁	四 六判 一・三 八〇 七四 円頁	四 六判 一・三 八〇 七四 円頁	B 6判 一・二 六〇 四四 円頁

目次

原著はしがき	iii
凡例	vii
第一部 ウィドン講義	
第一章 認知能力について	5
第二章 言語研究の対象	51
第三章 言語の一般的特徴	115
第二部	
第四章 人間言語の研究における課題と謎	203

原注	341
訳者解説	383
訳者あとがき	427
参考文献	442
日英術語対照表	445
人名索引	448
事項索引	454

言語論——人間科学の省察

第一部

——
ウィド
ン講義

第一章

認知能力について

本書における言語研究についての省察は、概して専門的なものではなく、やや思弁的・個人的な性格を帯びたものである。私の意図は、私がいくらか知っている言語研究の領域を取り上げて、現時点における知見を要約することではなく、また、現在進められている研究を多少とも深く論じようとするということでもない。ここで考察したいのは、むしろ、言語研究の主眼点と目標である。そして、言語学の諸問題——たとえば疑問文形成と照応との関係、音韻論における規則の順序づけの原理、イントネーションと否定の作用域との関係、等々——に、はじめは魅せられてはいなかった人々が、専門的な言語学で得られた結果を見て、興味をひかれることもあるのはなぜであるかを問い、さらにはそれに説明を加えてみたいのである。私はまず、適切な研究の枠組と思われるものを素描し、その枠内において、言語の研究がより広い知的関心を呼び起こすことができるように試みてみたい。さらにまた、これを一つのモデルとして、人間の本性に関する一種の理論を構築してゆく可能性をも考えてみようと思う。

そもそもわれわれはなぜ言語を研究するのであるか。その答えは数多く考えられる。私は以下において、いくつかの答えに焦点をあてるが、さりとて、他の答えについて、それらを軽視したり、それらの正統性を疑ってかかったりするつもりは毛頭ないのである。たとえば、単に言語を構成する諸要素自体にひかれて、それらの順序や配列、それらの歴史的起源もしくは個体における起源を見い出そうとしたり、思想、科学、芸術、さらには通常の社会的交流におけるそれらの用法などを見い出したいという向きもあろう。一方、言語を研究する一つの理由として、言語を伝統的に言う「精神の鏡」とみなすこ

とに心がひかれるということもある。私個人にとっては、これが最も強力な理由なのである。しかし、こう述べたからと言って、通常の言語使用の中に現われている概念と言語使用を通して発達してきた区別とを見ることがにより、人間精神によって構築された思考のパターンや「一般的認識」の世界に関する洞察が得られるということだけを意味しているわけではない。言語の構造と使用を支配している抽象的原理、すなわち、単なる歴史的偶然によるのではない、生学的必然性に由来する普遍性を持ち、人間という種の精神的特質に発する原理を、言語研究によって見い出すことができるかもしれないのである。このことが、少なくとも私にとっては、より心ひかれることなのである。人間の言語はいずれも著しく複雑な体系である。ある言語を知るようになるということは、それを成しとげるように特に仕つらえられていない生物にとっては、驚くべき知的発達をとげたことになる。ところが人間は、正常な子供ならば、比較的わずかな期間、言語的環境に接するだけで、特定の訓練も受けずに言語を獲得するのである。そして、幼児は特定の規則やそれらを統括する原理の持つ複雑な構造を何の苦もなく使用して、自らの思考や感情を他人に伝え、新しい観念や微妙な知覚および判断までも他人に生じさせることができる。人間の子供が直観的にまたほとんど努力もなしに成しとげたものを自ら構成し理解することは、特にこの目的のために仕つらえられてはいない意識の持ち主にとっては、およそ及ばぬ目標であろう。この故にこそ、言語は深く重要な意味において人間精神の鏡であると言えよう。言語はまさに人間の知性の産物であり意志や意識のはるかに及ばぬところに働く作用によって、個々人の中に新たに作り出され

るのである。

我々は、自然言語の特性、構造、組織およびその使用を研究することによって、人間の知性に固有の特徴をある程度理解することが望めよう。また、もし人間の認知能力が人間という種に真に独特の、最も著しい特徴であると言えるならば、言語の研究から人間性に関しても何らかの意義ある知見を得ることが期待できよう。そのうえ、言語以外の人間の能力および行動に関する研究領域には、直接的研究のより困難なものがあるが、言語を話し理解するという、人間のなしとげたこの特定の能力についての研究は、そのような研究領域を探究する際にも示唆に富むモデルとなろう。このように考えることは、あながち筋の通らぬことではあるまいと思われる。

私が考察したい問題は古典的なものである。この領域において問題を明確に定式化することにかけても、直ちに生じてくる問題に答えを与えるということにかけても、我々は主要な点で古典時代より進歩しているとは言いがたいのである。プラトンから現代に至るまで、真摯な哲学者達は、変ることなく一つの問いに困惑し、また興味をかきたてられてきたのであった。バートランド・ラッセルは、この問いを後期のある著作の中で次のように表明している。「人間は、短期間、個人的に、しかも限られた形しか世界と接触しないにもかかわらず、いかにして現に自らが知っている多くのことがらを知ることができるのであろうか」(ラッセル、一九六、頁)。断片的な、乏しい経験を与えられただけで、いかにして我々はこれほど豊かな知識体系を得ることができるのであろうか。もっとも、独断的な懷疑論者は、我

我はそのような知識は持っていないのだと答えるかもしれない。しかし、この種の懷疑は目下の論点には無関係である。一方、同様の問いは科学上の問いとしても生じてくる。すなわち、かくも限定された、個人的な経験しか与えられていないにもかかわらず、豊かな、高度に構造化された主観的認識の体系——人間の行為や相互交渉を導き、経験を解釈する際の指針ともなる体系——において、人々がこれほどまでに一致するのはなぜであろうかという問いである。

古典的伝統の下で、いくつかの答えが示唆されてきた。たとえば、アリストテレス流の考え方に従えば次のように論ずることができよう。世界は一定の様式に構築されており、人間の精神はこの構造を知覚する力を備えている。そしてその知覚の過程は、個物から種へ、そして類へ、さらに上位の一般化へと進み、個物の知覚から普遍概念の知識を得るのである、と。学習には、「先在する知識という基盤」が不可欠であり、我々は、発達した状態の知識に達するためには生得能力を持っていなければならない。しかし、このような知識は、「生得的に明確な形で存在するわけでもなければ、別の高度な状態の知識から発達してくるのでもなく、感性による知覚から発達してくるものなのである」。精神が、「このような帰納の過程を踏むことができるように構成されている」限り、豊かな知識の体系に到達しうるのだと考えることも、豊かな形而上学的仮定のもとでは、不可能なことではない。⁽¹⁾

しかしながら、説明の主たるにない手を世界の構造に求めるのではなく、視点を移して精神の構造に求める方が実り多いアプローチである。すなわち、我々が知りうることは、「悟性における概念様式」